『春と修羅　第三集』『詩ノート』における作品番号と創作日付に関する一考察

木村東吉

一　はじめに

賢治詩の研究に当たっては、作品が心象スケッチという方法を取っている点からして、作品と背景事実との関係、作品の創作方法、作品の解釈、詩人の詩精神の探求が総合的に進められることが必要である。本稿は、このうち創作方法解明のための作業として、創作日付と作品番号（以後、番号・日付と記す）の問題を考えてみたい。その順序が複雑に錯綜しており、謎をはらんでいるからである。

『春と修羅　第二集』（以後『第二集』と略し、『春と修羅　第三集』も『第三集』と記す）を例に錯綜の内容を概観すれば、一作品の逐次形に二つ以上の日付があったり、同じ番号で日付の違う二つの作品があったり、日付が番号にくらべて遅くなったりしている。また、日付順に配列した『校本　宮澤賢治全集』（以下、『校本全集』と記す）では、番号はとびとびだったり、多少前後したりしながらも、巨視的に見ればまず二番から五二〇番まで配列され、その後で、突然三二六番に返り、以後四〇三番までが繰り返されている。

『第三集』でも、表面に見える錯綜事例は少ないがほぼ同様の状況が認められ、これに『詩ノート』との関係も加えると、錯綜の内容はむしろ複雑になる。これらのうち、筆者は先に『第二集』の番号錯綜事例を整理してその理由の一部を解明する仮説を提出した。(1) 本稿では、これを受けて『第三集』『詩ノート』の作品の番号と日付の問題について整理し、『第二集』の残された問題に就いても考えてみたい。

残された問題とは、次のようなことである。賢治の詩作品では、長期間にわたって改稿が繰り返されているが、日付と番号は原則として継承される。このため、日付は作品が成立した日でなく、素材を得た日を意味するとされている（『第二集』『第三集』および『詩ノート』については、日付の日の気象データと作品を一つ一つ照合す

ることによって、一部季節の合わない作品もあるが、おおむねこれを確かめることができた[2]。にもかかわらず、先に指摘したような番号錯綜が起きるのは、詩人が改稿過程でしばしば別の日の素材を取り込むためである。その場合、『第二集』に即していえば、番号は早い方を引き継ぎ、日付は主要な背景となる素材を得た日の方を引き継いでいる。番号錯綜の表面的現象としては先述のような多様な形があるが、これを残された資料の粗密の差と捉えると大半の問題が解決される。つまり、『第二集』では、原稿の上で直線的にたどられる逐次稿（仮にこれを連続型逐次稿と呼ぶ）の他に、作品の場面をほぼ同じくして異稿関係にあると見られる逐次稿もある（仮にこれを分岐型の逐次稿と呼ぶ）のだが、そのいずれにも二つ以上の日付がある作品は、比較的後になって黄罫詩稿用紙（一九三〇年以後使用された）などにおいて改稿されたもので、資料が良く保存された例である。これに対して、資料が順次少なくなって改稿過程の中間稿を失えば（原稿のコピーを参照してみれば、二つの作品が融合される段階の原稿には、しばしば猛烈な書き込みがあり、新しい作品ができた後は失われやすい形をしている）、同一番号に日付の違う二つの作品がある形になる。さらに最初のモティーフを得た日の資料をも失えば、番号に比べて日付が遅い作品だけが残るわけである。日付がずれた作品だけが残った作品には、一九二五年末以降に使われた赤罫詩稿用紙か、それ以前に改稿されたものが多い。

ただ、このように考えた場合でも、番号が途中から繰り返される理由と、作品の場面や季節が違い、素材に重点をおいて見た場合はモティーフにも共通点が稀薄な（祠の前のちしゃのいろした草はらに）と『風と反感』が番号九〇番で重複している理由とについては、説明がつかない。これが当面の問題である。

そこで本稿では、『第三集』の問題に併わせて、これらの問題を考えるためのヒントを求めたい。『詩ノート』は、『第三集』の詩稿の最も早い段階の形を残したものとされている。『新修　宮沢賢治全集』（以後これを『新修全集』と記す）第四巻の解説では、その成立期について「昭和二年頃と推定し得ると思われる」とある。『詩ノート』に収められている一〇八二番の〔あすこの田はねえ〕の逐次稿（二）「稲作挿話（未定稿）」が一九二八年三月「聖燈」第一号に掲載されているから、収録された最後の作品一〇九二番「藤根禁酒会へ贈る」の創作日付の日一九二七年九月一六日以降、一九二八年初頭までの間が一応の成立期ということになるが、追加挿入稿などについてはこの限りでない。

『詩ノート』から『第三集』への過程には、『第二集』と類似の事例と、その原因を類推させるものが幾つか見出せる。そして、『詩ノート』から『第三集』への過程について見ることは、『第二集』において捉えられた事象の背景を探って賢治の創作方法の実態を確かめ、筆者の先の仮説を再検討する意味を持つはずである。

二　『詩ノート』について

『校本全集』において校訂されている以前の『詩ノート』の日付と番号に注目してみると、ここに番号反復の原因ともなりえた事例と、番号が重複していながら季節と作品の場面が大きくずれている事例、更に、『第二集』に見た分岐型逐次稿が発生する原因と見られる事実が認められる。以下、順次その点を見ていくが、その前に、『詩ノート』における日付と番号の基本的性格を確認しておく必要がある。そこで、次の四類に整理される事実が注目される。各類の中の各項目には、以下の論述の都合上、一連番号をつけておく。

a類　『詩ノート』の基本的性格を示す事例

（1）『詩ノート』には、七四四番と七四五番についで、一〇〇一番～一〇九二番の作品が記されている。つまり、七四六番～一〇〇〇番を欠くが、一〇〇一番以降に欠番がない（『校本全集』の目次では一〇九一番が欠番だが、元のノートでは詩句を欠いたまま、「一〇九一」の番号と「高橋武治の兄に贈る」という題と日付がある）。なお、七四五番と一〇〇〇番の間に、日付で約二カ月の空白があり、一〇〇一番から日付が一九二七年になる。

（2）番号が書き込まれている状態に注目すると、作品を記した筆記用具と番号を記した筆記用具が違う場合がしばしばある。例えば一〇〇一番から一〇一四番までの番号は、詩稿を記した鉛筆ではなく筆記用具をかえて藍インクで記している。しかも、一〇〇一番については、最初に「五〇〇一」と記した後「一〇〇一」に改めた事実がある。

（3）途中で記入を放棄したものは、番号を欠いている。例えば、五頁左の〔凍ったその小さな川に沿って〕一四頁左の〔いろいろな反感とふゞきの中で〕二九頁左の〔いくつの／　天末の白びかりする環を〕がそれである。

（4）『詩ノート』の〔囈語〕（一九二七・六・一三・）と〔青空のはてのはて〕（一九二七・六・一二・）〔わたくしは今日死ぬのであるか〕（一九二七・六・一二・）では、日付の違う作品だが、最初一〇七四番の番号重複があり、前者が一〇七六番に改められている。これは後の二作品をとばして〔囈語〕を書き、後で気づいて日付順に番号をつけたと考えられる。

これらの点から、ノートと番号に関して、基本的に次のようなことがいえるであろう。（1）で、七四五番と一〇〇〇番の間に欠番があり、以降に欠番がないことから、番号がノート段階で一連番号だったことがわかる。一〇九一番のような例外的な場合もあるが、（2）と（3）は、番号がおおむね後から記入されたことを示唆している。（3）は、いわゆるウル・ノート（手帳）から『詩ノート』への転記に際して、作品の選択がなされていることを推定させる。〔いく

つの／　天末の白びかりする環を）は、前後の作品と筆勢や記入に使われた鉛筆の太さに違いがあるので、後からの記入であろうが、途中で放棄されたものと思われる。これらのことがあってなお、一〇〇一番以降に欠番がないので、番号がノート段階ではじめて付けられたと推定される。（4）は、単純なミスの手直しだが、作者がこの段階で日付と番号のずれに無関心でなかったことを示している。

また、『詩ノート』の形態からして削除された様子もない。[3] したがって、七四六番～一〇〇〇番の欠番は、当初からであると考えられる。賢治の詩作品には八〇〇番台九〇〇番台の作品がまったく無い。これは、作者の番号のつけ方の特徴の一つを示している。『第二集』でも二〇〇番台を欠き（唯一、二五八番『渇水と座禅』があるが、これは日付と前後の番号からして三五八番の誤記と考えられる）、六〇〇番台の作品が無い。

b類　番号反復の可能性をはらむ事例

番号について、こうした一般的性格を確認した上で、次の（5）（6）の事項に注目すると、ここに番号反復の原因になったかもしれない事例が認められる。

（5）番号を書き込む過程で、一〇四三番の次を百四四番とし、以後一七〇番までの二七作品に百番台の番号を付け、一〇七一番に書きながらの訂正の跡をとどめ、一〇七二番からは再び一〇〇〇番台で記している。なお、この錯誤は『詩ノート』の段階で、百四四番を一〇四四番に、一七〇番を一〇七〇番に改める要領で訂正してある。

（6）『詩ノート』では、七四四番および七四五番の日付を一九二七年、一〇〇一番～一〇三九番の日付を一九二八年とする（日付が月と日だけで年を欠くものを含む）が、詩稿用紙に書かれた『第三集』の原稿では、一九二六年、一九二七年としている（一〇一二番は例外で詩稿用紙にも一九二八年とある。『校本全集』で校訂）。これらの作品では、『詩ノート』と『第三集』で日付が一年ずれている。

この（5）（6）の事項は、おそらく単純な番号や年号の取り違えだが、これらの事例から、作品整理の仕方がうかがわれる。（2）も合わせ考えるとき、番号はノート全体に一括して付けられたり、作品ごとに一つ一つ付けられていったものではなく、ある程度の量を一括整理しながらつけられたものである。（6）は、大正から昭和への元号の切り替えが、西暦への換算を惑わせたものであろう。『詩ノート』の日付通りでは気象資料と作品内容とで矛盾する例が幾つか出てくるが、『校本全集』（「増水」に関しては『新修全集』による）の校訂にしたがって一九二六年、一九二七年の日付に改めるとこの矛盾が解消するからである。[4]

このうち（5）は、『第二集』の五二〇番につづく三二六番からの番号の繰り返しと類似した性格を持っている（例えば五二〇の五を

三と間違え、次の番号を三三一と打てば、後は連続的なずれを生じる。『第二集』の例の背後にこうした錯誤を想定すれば、二つの事例は、合理的説明が困難な錯誤が突然起きている点で共通する。この種の錯誤を作者の一種の癖と捉えるなら、『第三集』の場合は、同一ノート内での取り違えだったから修正できたが、『第二集』の背後に類似のノートがあったとして、そのノートを取り替えた際等にこうしたミスが起きていたら、ミスに気づくまでに時間がかかり、詩稿用紙に写されてからは、訂正する機会を失ったとも考えられる。先に記した一〇一二番は、日付が詩稿用紙にも一九二八年と記されたため、以後訂正されなかった例である。

『第二集』の背後にノートを想定することは困難でない。一九二六年八月以前の生前発表形は赤罫詩稿用紙稿以前の形を持つが、これはウル・ノートと赤罫詩稿用紙形の中間に一定の完成度をもつ詩稿があったことを示している。また、九三〔日脚がぼうとひろがれば〕、一六六「薤露青」、一九五「塚と風」、一九六〔かぜがくれば〕の初稿は、ノンブルをつけた音楽用五線紙のノート用紙に記されている。この事実は、詩稿がノートに記されていた段階があったことを示唆している。[5] さらに、『第二集』に収録された一一二篇の内、後半の番号の繰り返し部分には二三篇があり、これは『詩ノート』（ノートはA、Bの合計二冊ある）から『第三集』に採用されたもの（全部で四三篇）のほぼノート一冊分に相当する。

筆者は先に、「後半の番号の繰り返しは、前半の番号のモティーフが後半の日付の日の背景を得て成立した可能性を考えさせなくもない」が、「前半と後半で番号が重複している三三三番の「客を停める辞令」と「遠足統率」、三五八番の「峠」と「渇水と座禅」では、前半の作品どうしで番号が重複していた作品に見られた共通項がまったく認められないから」「この推論の採用には慎重でありたい」と述べた。[6] なお、慎重な検討が必要だが、番号のずれの起き方が一連のものであるという意味で、新しい素材の取り込みによる日付のずれや、次の（9）の事項で見る差し替え稿の場合を考えるより、こちらの方が近いのではあるまいか。

c類　日付と作品の舞台が大きくずれる番号重複の事例

次に、番号重複作品で、季節や作品の場面が大きくずれた例について見る。このようなものができた原因を示唆するものには、二つのケースがあり、次の（7）（8）の事項はその一つである。

c－1　追加挿入稿の事例

（7）『校本全集』の目次では、一〇一七〔日が照ってゐて〕の後に一〇一七〔水は黄いろにひろがって〕を加えてある。ノートの同一ページに記された二つの作品につけられた番号である。『詩ノート』では、一〇一七〔日が照ってゐて〕の番号の下に「一九二七年

ノ／初メニ入ル」と記されており、二〇一七〔水は黄いろにひろがって〕には日付がなく、番号の下に「全／八月ニ入ル」とある。このうち後者を無罫詩稿用紙に書き写した時、番号を七三〇ノ二に改め、日付を（一九二七・八・一五・）としている。『新修全集』では、日付を一九二六年八月一五日に校訂し、配列順序も変更している。

（8）一〇七〇番のうしろには、後からの記入と見られる赤インクで書かれた作品があり（番号の書き方と筆記用具が前後の作品とは違う）、一〇七〇（2）の番号を与えているが途中で止め、全部を削除している。

この（7）（8）の事項は二つのことを考えさせる。その一つは、ノートによる作品整理が終わった後から、その空白を利用して別の作品が新たに組み込まれると、（7）のように、ダッシュをつけたり、一〇七〇（2）のように、前の作品の内容や日付とは関係なく前の作品の番号を借用して枝番をつけているので、二〇一七〔水は黄いろにひろがって〕を改めた「増水」に七三〇ノ二という番号が与えられるためには、七四三番までの作品を整理したもう一つのノートがあったことを推定させることである。

考えられることの二つ目は、一〇一七番について背景を調査してみると、「岩手日報」一九二七年四月七日の記事に、この年の記録的な大雪の後の雪解け水による増水で一九二七年四月六日午後一時ごろ、北上川の朝日橋で「八尺八寸」の水位の上昇があったことが記録されている。二〇一七番は日付を欠くが、それが一〇一七〔日が照ってゐて〕（一九二七・三・二七・）の後に書き込まれているのは、この事実と関連があるであろう。『詩ノート』で（一九二七・四・四・）の日付を持つ〔けさホーと縄をになひ〕にも、「水増す川と」といった表現がある。〔水は黄いろにひろがって〕が最高水位時を描いたものではなく、堤防を溢れ出したばかりの時を描いたものであることや、ノートの空白の都合などもあって日付は少しずれた場所に書き入れられたのであろう。また、これが一九二六年八月一五日の日付で番号を七三〇ノ二番に改められたことについても、一九二六年八月六日と一八日に北上川が増水した事実があるので、これがおそらく関係しているであろう。一九二六年八月七日の「岩手毎日」に「花巻地方も降雨甚だしく朝日橋下に六日午前七時十尺豊沢橋は同七時五尺五寸の増水があった」とあり、一九日の「岩手毎日」にも「十七八日両日の降雨のため北上川は日詰で十七日午後八時八尺二寸花巻は十八日午前一時十尺」の水位の上昇があったと記されている。ここでも日付が少しずれているが、「増水」が最高水位の時を描いたものでないからではあるまいか。番号変更とメモと背景事実とを睨み合わせるなら、背後にこうしたモティーフの共通したメモがあったことを読み取ることができる。こうしてノートに後から作品を挿入した結果、作品内容に関係がない番号重複が起きているのであろう。「増水」の番号が「七三〇ノ二」となっているのは、『詩

ノート』の「一〇七〇（2）」の番号の書き方とも通じるところがある。日付が大きく隔たって季節も違う番号変更とその結果としての番号重複の一つの型である。七三〇〔おしまひは〕と七三〇ノ二「増水」とは日付も違い、内容にも関連が無い。

ここで推測を逞しくするなら、『第二集』の〔祠の前のちしゃのいろした草はらに〕と「風と反感」とが、同じ九〇番の番号を持っていながら日付も季節も大きくずれているので、これが「増水」の場合と類似の事情を背景に持つ可能性が考えられなくもない。しかし、「増水」の場合は七三〇ノ二と書いていて、完全な番号重複ではなく、これを仮に重複関係にあると見た場合でも、番号の重複関係にある作品同士の日付が近いのを特徴とするはずだが、九〇番の二作品は一方が「九〇ノ二」となっていないし日付も大きく離れている。この点で、これらを同類の現象と見ることには疑問が残る。そこで、もう一つの事例を検討する必要がでてくる。

c－2　差し替え稿の事例

季節と作品の舞台が大きくずれた例として注目されるもう一つのケースは、『詩ノート』から『第三集』への移行段階で作品の差し替えが行われている場合である。

（9）『詩ノート』の一五七（一〇五七に相当する）〔陸稲播きす〕は、番号の「七」の部分を削除したうえ全体を削除されて、番号を次の作品〔古びた水いろの薄明穹のなかに〕にゆずっているので、『校本全集』でもこれを削除したものと見なしている。ところが『第三集』では、〔陸稲播きす〕が発展して一〇五六番〔秘事念仏の大元締が〕に改められたため、『詩ノート』の一五六（一〇五六に相当）〔サキノハカという黒い花といっしょに〕と番号重複が起きている。いわば作品の差し替えである。

『詩ノート』から『第三集』への移行過程で、作品の差し替えがなされたため番号の重複が起きている例には、さらに次のようなものがある。

『詩ノート』の一〇二〇番〔労働を嫌忌するこの人たちが〕を『第三集』では「野の師父」に差し替え、『詩ノート』の一〇二一番〔あそこにレオノレ星座が出てる〕を『第三集』では「和風は河谷いっぱいに吹く」に差し替えている。

さらに『詩ノート』の一〇四一番は「清潔法施行」だが、『第三集』では「午」と差し替えているように見える。ただ、「午」の場合は自筆の番号を欠くので厳密には差し替えではない。ただ日付によって整理すれば、一〇四〇番と一〇四二番との間に位置する形になっているので取り上げておく。

これらについて見ると、入沢康夫氏の指摘がすでにある[7]ように、『詩ノート』の段階では「社会主義思想」など、政治的・社会批評に関心を示した作品があったが、『第三集』では慎重にこれを避け、

四作品とも差し替えられている点で共通する。

〔サキノハカという黒い花といっしょに〕と〔秘事念仏の大元締が〕の差し替えは、前者に「革命がやがてやってくる／云々」の語句があるのを避けたものと見られる。〔労働を嫌忌するこの人たちが〕が「野の師父」と差し替えられたのは、前者の社会批判的主題の露骨さを避けたものと見られる。「和風は河谷いっぱいに吹く」は『詩ノート』で一〇八三番、日付も（一九二七・七・一四・）であったものを詩稿段階で番号を一〇二一番に改め、その後の改稿で日付を（一九二七・八・二〇・）に改めている。日付の変更は新しい素材の取り込みがあったためである。〔あそこにレオノレ星座が出てる〕には、レオノレ星座に新しい時代の到来の予兆を見ていることを仄めかした後、「社会主義者が行きすぎる」という語句があるから、かなり直接的な表現になっている。これを避けるための差し替えと見られる。「清潔法施行」が「午」に差し替えられたとみると、前者が、雑草を焼き払えば「路と／家とがきれいに残る」として、これで社会腐敗防止法のようなものを寓意したものだったことが考えられる。

この一群の作品で、政治的・社会批判に関心を示した作品が削除されるのではなく、あえて別の作品と差し替えられている理由については別に検討するとして、作品の舞台と日付が大きくずれた作品間で番号が重複している事実がここにもあるわけで、『第二集』の九〇番の問題がこれに関わる。

この場合は、〔祠の前のちしゃのいろした草はらに〕に、作者が懸念するような内容が含まれていたのかどうかが問題になる。詳細は別稿に譲るが[8]、この作品に書かれた「樹のいちいちの心からは／ことしの夏の設計が／あおあおとして雲に描かれる」（生前発表形）とある部分が、詩人の学校劇の計画を意味していたとすれば[9]、この劇の上演が岡田文部大臣の学校劇禁止令を無視する形でなされているから、羅須地人協会時代の周囲の状況とも関連して注目される。

また、これらの差し替え稿と元の作品との関係でいえば、作品の素材に重点を置いて見ると相互の異質性が目立つが、作品の主題の次元まで抽象するなら、「午」を除く作品間に通底するものが認められることも留意される[10]。

d類　分岐型逐次稿発生の原因となった事例

最後に、分岐型逐次稿の原因になったと思われるものには、次のような事実がある。

（10）一〇八七番から一〇九〇番まではいずれも一九二七年八月二〇日の日付を持つ作品であるが、いずれも記入の過程で大幅な改稿がなされている。一〇八七番で三種、一〇八八番で二種、一〇八九番では二種あるいは三種（二頁にわたって書かれた第二稿を続けて一作品と見るか、二作品と見るかによる。『第三集』との関連を重

視すれば、三種と見た方が妥当と思われる）の草稿があり、『第三集』で一〇九〇番となる作品には、番号と日付がない。また、『詩ノート』の一〇八七番が『第三集』では一〇八八番となり、『詩ノート』の一〇八八番と番号の重複が起きている。

これは、ノートで作品を改稿しながら整理したこともあった事実を示している。この場合は、同一の、あるいは一連の事実からどのような主題を引き出そうかと多様な試みがなされていると見られる。ここに筆者が分岐型逐次稿と呼ぶものが発生している。『第三集』でも、日付と番号が同じものを、すべて同一作品の逐次稿とみなす編集をしていれば、(9) の一〇五六番や (10) の別稿をも、逐次稿に含み込む可能性があったわけである。

以上の検討を踏まえ、ノート稿が詩稿用紙に書き写される段階で、どのように展開しているのかを、次に検討してみたい。

三　『春と修羅　第三集』の問題事例について

『校本全集』の『第三集』は、詩稿用紙に書かれた日付と番号がある詩作品から、原稿が挟まれていた黒クロース表紙の裏のメモの期間指定に適合するものを選んで編集したものである。これによって『詩ノート』収録の作品より前の番号を持つ七〇六番～七四三番から採られた二三作品、『詩ノート』から発展した四二作品（一部差し替え稿を含む）、番号を欠く一九二七年の一作品、一九二八年の三作品の合計六九編を収録している。『詩ノート』がA、Bの二冊からなっていることを考えると、七〇六番～七四三番の二三作品は、ほぼノート一冊分に相当する。これに加えて先にも指摘した七三〇ノ二番の存在を考慮すれば、七〇〇番台の作品を記した別のノートがあったことは想像に難くない。

ところで、本節では『詩ノート』から『第三集』への過程で見られる日付と番号に関する問題事例を検討し、番号錯綜の背景を探ってみたいのであるが、単純なミス等は『校本全集』で校訂済みなので、詩人の創作方法を明らかにするのに必要なものだけに絞って注目すれば、ほぼ次のようになっている。

『第二集』で見たような、全体を巨視的に見た場合の番号の繰り返しは例がない。これは『詩ノート』段階で、事前に訂正したことによって避けられたと考えられる。

作品が別の日の素材を取り込んで改稿された時、『第二集』では一つの作品の逐次稿に二つ以上の日付がある連続型逐次稿と、同じ番号で二つの作品ができる分岐型逐次稿があったが、『第三集』では、先に見た通り、これに加えて詩稿をノートに整理した後、さらに追加挿入的に書き込んで、挿入した場所の直前の番号を借用した場合（以後これを追加挿入稿と呼ぶ）と、『詩ノート』から『第三集』への過程で差し替えた場合（以後これを差し替え稿と呼ぶ）において番号の重複があった。

（1）一作品で二つの日付がある連続型逐次稿の例には、次のようなものがある。

一〇四六「悍馬」（一九二七・四・二五・）の逐次稿には、『詩ノート』の〔萱草芽をだすどてと坂〕（一九二七・四・二四・）がある。「悍馬」の日付は、最初〔萱草芽をだすどてと坂〕と同じ日であったが訂正されている。これは〔萱草芽をだすどてと坂〕が、四月二五日の情景を取り込んで成立したためと見られる。[11]

一〇二一番「和風は河谷いっぱいに吹く」（一九二七・八・二〇・）の番号変更は、先に見た通り作品の差し替えのためであるが、この作品の場合は、『詩ノート』の一〇八三番〔南からまた西南から〕（一九二七・七・一四・）の日付が、素材の取り込みによる改稿にともなって（一九二七・八・二〇・）に改められた経緯がある。[12]

これらの例において、ノート稿が失われていれば、番号に比べて日付が後ろにずれた原稿だけが残る形になったはずである。

（2）同一番号、同一日付でモティーフに開きがある分岐型逐次稿の例には、次のようなものがある。

『詩ノート』の〔赤い尾をしたレオポルドめが〕と『第三集』の〔土も堀るだらう〕とは、番号と日付が共にそれぞれ一〇〇八番と（一九二七・三・一六・）で、気象状況を写す表現も「山は吹雪のうすあかり」と「山は吹雪のうす明り」で共通している。しかし、中心モティーフに開きが大きい。『詩ノート』の同じ頁に番号を欠く同日の作品〔いろいろな反感とふゞきの中で〕があることを考慮すると、根を同じくするメモが想定され、これらの作品を踏まえて『第三集』の〔土も堀るだらう〕が成立していると見られる。

『詩ノート』の〔古い聖歌と〕と『第三集』の〔燕麦（オート）の種子をこぼせば〕は、番号と日付がそれぞれ共に一〇二五番と（一九二七・四・四・）で、気象状況を写す表現が、「南西の和風が／そらを行き／（中略）／うるんで黒い雲いっぱいに／春翔ける鳥の交響」とあったり、「黒雲は温く妊んで／一きれ、一きれ、／野ばらの藪を渉って行く／（中略）／どんどん翔ける雲の上で／ひばりがくるほしくないてゐる」とあったりして、相互に類似している。『校本全集』もこれらを逐次稿として扱っているが、前者では数学教師の退役海軍中佐が東京へ帰郷するのを中心モティーフとし、後者では酒樽を積んだ河舟を中心に描いている点で内容の違いが大きい。

因みにいえば、『校本全集』の校異では〔燕麦（オート）の種子をこぼせば〕が『詩ノート』の一〇二八番「酒買船」を取り込んだとする。しかし、〔燕麦（オート）の種子をこぼせば〕には「ぽろぽろの南京袋で帆をはって／船が一さうのぼってくる／（中略）／むらきな南の風に吹かれてのろのろとのぼって行けば」とあって、南風を利用して船が河を遡っている様子が描かれており、四月四日には確かに南風が吹いている。これに対して〔じつに古くさい南京袋で帆をはって〕では「じつに古くさい南京袋で帆をはって／おまけに風に逆らって」とあり、

風が北風であったことを示唆しているが、この年四月五日には確かに北風が吹いていた事実がある。これからすると、〔古い聖歌と〕と〔じつに古くさい南京袋で帆をはって〕とは、それぞれ別の日の素材に基づいて成立した可能性が強い。[13]

これら分岐型の逐次稿に、いつでも独立して独自に発展する可能性があることは、注目されるべきであろう。分岐型の逐次稿が別の日の素材を取り込んで独立したと推定される例には、次のようなものがある。

『第三集』七一八番の「蛇踊」（一九二六・六・二〇・）と「井戸」（一九二六・七・八・）では日付が異なるが、共に農作業の合間の小休止の間のことを描いたものであり、明るく振る舞う詩人の心の底に疲労感にともなう鬱屈したものがあり、やがて『詩稿補遺』では、「蛇踊」が再び「井戸」を吸収している。

『第三集』七四一番の「煙」（一九二六・一〇・九・）と「白菜畑」（定稿は日付を欠く）では、後者の下書稿（一）が『詩ノート』の七四五番〔霜と聖さで畑の砂はいっぱいだ〕（一九二六・一一・一五・）である。いずれも詩人が花巻南郊桜の自耕地に立って見た情景を描いた作品で、前者では北を遠望して小船渡にあった煉瓦工場の煙を捉え、後者では近景に白菜畑を捉えている。煙に呼応する天上の雲と詩人の病気とが、明るかった過去に比べ未来に暗い影を落としている点でモティーフに共通したものがある。「白菜畑」の定稿が日付を欠いた背景には、「煙」と並ぶ分岐型の逐次稿が七四五番の〔霜と聖さで畑の砂はいっぱいだ〕と融合されて成立したという事情があったと見られる。

ここで、少し想像を逞しくすれば、次のようなことも考えられる。『第二集』『第三集』には、わずかだが日付と番号の順序関係はずれていないのに、日付と作品内容に季節的なずれがある作品がある。『第二集』で春の水辺の花を描いた一八四「春」が夏の日付（一九二四・八・二二・）を持ち、『第三集』で秋の稲穂を描いた七一五〔道べの粗朶に〕が初夏の日付（一九二六・六・二〇・）を持つのがそれである。また、〔霧がひどくて手が凍えるな〕のように、作品内容と気象状況にかなり開きがある例もある。[14] これらについてノート稿以前の段階での作品の融合を想定すれば、見てきた詩人の創作方法の中で日付と作品の季節のずれの問題も解決する。

差し替え稿と挿入稿については、前節で述べたので繰り返さない。

最後に、『第二集』で番号に比べて日付が後ろにずれた作品では、背後に他の作品やメモの取り込みがあったことを想定したのであるが、『第三集』では、この他に、別の作品やメモを取り込んでいるにもかかわらず、主要な情景を換えなかったために日付がずれない場合が多数あった。これは『詩ノート』の存在によって初めて見えてきた部分である。

次の別表にそれを列挙する。

別表　『第三集』作品成立のために、元になった作品と吸収された作品

番号	『第三集』作品名	日付	番号	『詩ノート』作品名	日付	番号	吸収された作品名	日付
1022	〔一昨年四月来たときは〕	1927.4.1.	1022	〔根を截り〕	1927.4.1.	1052	「ドラビダ風」	1927.5.1.
1036	「燕麦播き」	1927.4.11.	1036	〔いまは燃え尽きた瞳も痛み〕	1927.4.11.	1026	〔けさホーと縄とをになひ〕	1927.4.4.
1059	「開墾地検察」	1927.5.9.	1059	〔芽を出したために〕	1927.5.9.	1060	〔苹果のえだを兎に食はれました〕	1927.5.9.
						1062	〔墓地をすっかり square にして〕	1927.5.9.
1077	「金策」	1927.6.30.	1077	〔その青じろいそらのしたを〕	1927.6.30.	1078	〔金策も尽きはてたいまごろ〕	1927.6.30.
1080	〔さわやかに刈られる蘆や〕	1927.7.7.	1080	〔栗の木の花さき〕	1927.7.7.	1081	〔沼のしづかな日照り雨のなかで〕	1927.7.10.
1088	〔もうはたらくな〕	1927.8.20.	1088	「祈り」	1927.8.20.	1087	〔ぢしばりの墓〕	1927.8.20.

注、『校本全集』の校異では一〇五九番「開墾地検察」が、一〇六〇番〔苹果のえだを兎に食はれました〕から成立したと見ているが、下書稿（三）の段階では一〇五九番から採った詩句もあるから、『詩ノート』の同日同場面の連作一〇五九番～一〇六二番を踏まえて成立していると見られる。

この作品群の存在を知ってみれば、賢治の詩作品においては、作品の融合や吸収が創作方法のいわば常態であったことがわかる。日付と番号の錯綜は、こうした創作過程で生まれた作品の中の幾つかが日付を変えたために起きたことだったと了解される。

作品を融合して日付を変える場合と、日付を変えないで一部を吸収する場合とは何によって区別されるのかという問題は、改稿の内容によるといえる。日付を変えた場合でも変えない場合でも、ほとんどの場合は、日付の日の気象状況と作品内容とに密接な関係が確認できる。そうしたなかで、例えば作品の主題と主要な情景を変えず、表現の一部を自作の作品から借用しただけであれば、日付を変えないのが自然である。一〇三六「燕麦播き」や一〇八〇〔さわやかに刈られる蘆や〕の成立過程は、そうした説明が相応しい。類似した状況のもとで得られた表現を、別の作品に流用したにすぎないからである。一〇五九「開墾地検察」、一〇七七「金策」、一〇八八〔もうはたらくな〕などは、同日の作品を吸収したのであるから、根を同じくするメモから生まれた複数の作品のうち、どの主題を中心に選んだかという問題である。

これらに対して、一〇二二〔一昨年四月来たときは〕の場合は、一九二七年四月一日が素晴らしい晴天で五月一日が曇天であった。作品を晴天のイメージでまとめるなら（一九二七・四・一・）の日付になるのが当然であろう。日付が素材を得た日を示すことを端的に示す例である。

賢治詩における日付が主要な背景となる素材を得た日を意味し、番号がノート稿段階で整理された作品のモティーフにつけられたものであることは、以上の整理と調査を通して再確認できたと考える。

しかしなお、問題は残されている。『第三集』には番号が欠落した作品があり、『第三集』の作品が改稿されて日付と番号を失う例もある。日付と番号の意味を考えるためにも、それらの事例を検討しなくてはならないが、この問題は、詩人の『第三集』構想と関わるところがあり、しかもこれが揺れている。単純な問題ではないので、稿を改めて考えたい。(15)

注

1　拙稿「『春と修羅　第二集』における作品番号と創作日付についての一考察」（「宮澤賢治研究 Annual」3号　1993.3.）

2　拙稿「資料と考察『春と修羅　第二集』における創作日付の日の気象状況」（「島根大学教育学部紀要」第26巻　1992.12.）および「資料と考察『春と修羅　第三集』および『詩ノート』における創作日付の日の気象状況」（山根巴、横山邦治編『継承と展開』第六巻　和泉書院刊に収録予定）参照。なお、季節や気象状況と創作日付が一致しない作品とは、七一五〔道べの粗朶に〕と七三九〔霧がひどくて手が凍えるな〕の二篇である。

3　『校本全集』第六巻校異によると、このノートは、十枚のノ

ート用紙を重ねてこれを二つに折り畳んだものであったが、折れ目が切れて現在は二十枚になっているという。したがって、七四四番七四五番を記した第1葉と一〇〇一番を記した第2葉との間に削除があった場合は、三八頁と三九頁の間に番号の欠落が生ずるか、半葉の用紙だけが残されるかしなければならないが、その様な事実は報告されていない。

4　拙稿「資料と考察『春と修羅　第三集』および『詩ノート』における創作日付の日の気象状況」(注2に同じ)参照。

5　杉浦静『明滅する春と修羅』(蒼丘書林　1993.1.)〈『春と修羅　第二集』の構想〉の章に同様の指摘がすでにある。

6　注1に同じ。

7　入沢康夫『宮沢賢治　プリオシン海岸からの報告』(筑摩書房　1991.7.)

8　拙稿「『春と修羅　第二集』〔祠の前のちしゃのいろした草はらに〕考」(「国語教育論叢」三号　1994.3.に掲載予定)

9　小原忠「『ラジュウムの雁』と関連作品」(「賢治研究」24、1980.4.宮沢賢治研究会編)に指摘がある。

10　拙稿「作品番号欠落過程と《春と修羅　第三集》一九三一年構想」(「島根大学教育学部紀要」第27巻―1号1993.12.)参照。

11　拙稿「資料と考察『春と修羅　第三集』および『詩ノート』における創作日付の日の気象状況」ですでに述べたことであるが、気象状況を参照しても矛盾がない。

12　注11に同じ。

13　注12に同じ。

14　この点についても注11の拙稿に述べたことだが、この作品の創作日付の日の花巻の最低気温は摂氏20・5度であるから、寒い朝ではない。

15　注10に同じ。